city & life

都市のしくみとくらし

別冊

Let's Greening
緑で生まれ変わるまちとくらし

第33回（2022年度）
緑の環境プラン大賞受賞作品集

city&life 別冊

Let's Greening
緑で生まれ変わるまちとくらし

ひとのいる風景讃歌
——緑のまちづくりが平和につながる

審査委員長 進士五十八

今号、city&life別冊「Let's Greening緑で生まれ変わるまちとくらし」は「第33回緑の環境プラン大賞」の受賞者のみなさんの完成作品の紹介です。

本賞の特色は、第一生命、同財団の絶大な事業費助成によって、ヤル気のある団体は誰でも応募でき、実現できることです。

国土交通大臣賞はじめ各賞に助成金の差はありません。他への模範となるか、地域性や社会性がプランに独自性を発揮できているか審査していますが、受賞作はみんな素晴らしい！審査の観点は講評に譲り、現下、考えたい一点を述べたいと思います。

受賞作テーマに「住民が憩う」「みんなのガーデン」「体験と交流」「子どもの居場所」が続くことです。本誌の写真では「緑の環境」にフォーカスを絞った美しい作品に仕上がっています。ですが本賞が目指すゴールは人のいる風景とみんなが元気で楽しいまちづくりです。

「緑（グリーン）」の語源はアーリア語の「ghra（ガーラ）」で成長するの意、生命の象徴です。現下の世界はかけがえのない生命を奪い、人のいる明るい風景を墓標と真暗な風景に変える愚行を重ねています。

江戸期、『都林泉名称図会（みやこりんせんめいしょうずえ）』の龍安寺石庭では寺僧に案内され庭内を歩く5人を一緒に描いています。人がいての緑を忘れてはいけません。

緑豊かな環境をみんなで相談し、みんなで造り育て、異文化交流のガーデン・プラザを創り出す協働が平和につながるのです。あなたも本賞に応募しませんか。

しんじ・いそや——東京農業大学名誉教授・元学長／福井県立大学名誉教授・前学長／農学博士（環境学・造園学）

表紙——食・農・遊び 五感を育む園庭作りプロジェクト（関連記事:p12）
裏表紙——北潟湖畔ガーデン 体験と交流が生まれるクロステラス（関連記事:p4）
photo:坂本政十賜

contents

シンボル・ガーデン部門

国土交通大臣賞	金剛沢緑地愛護協力会	住民が憩う新しい里山「八木山テラス」の創生	宮城県仙台市	2
都市緑化機構賞	特定非営利活動法人awarart（アワラート）	北潟湖畔ガーデン 体験と交流が生まれるクロステラス	福井県あわら市	4
第一生命賞	札幌アイヌ協会	札幌イオルの森	北海道札幌市	6

ポケット・ガーデン部門

国土交通大臣賞	花咲き山	緑が育つ人が集まるみんなのガーデン「ららぱーく」	千葉県市原市	8
第一生命財団賞	一般社団法人異才ネットワーク	自然やいのちと共生する不登校の子どもの居場所づくり	滋賀県大津市	10
コミュニティ大賞	社会福祉法人想伝舎	食・農・遊び 五感を育む園庭作りプロジェクト	宮城県遠田郡美里町	12
	群馬県立藤岡北高等学校	みんなの広場 いこいの杜（もり）	群馬県藤岡市	13
	群馬県立富岡実業高等学校 草花部	富岡の歴史に触れる庭プロジェクト	群馬県富岡市	14
	新潟県立島見緑地聖籠緑地指定管理者 株式会社日建緑地	みんなの花壇プロジェクト	新潟県北蒲原郡聖籠町	15
	特定非営利活動法人備前プレーパークの会	どんぐりの森 コミュニティガーデン	岡山県備前市	16
	香川大学創造工学部環境デザイン工学領域	ウェルカム「レイン」ガーデン“ぽぽぽ”	香川県高松市	17
	熊本県立熊本農業高校	季節を感じる熊農緑地～地域の拠点としての役割を発信する空間づくり～	熊本県熊本市	18
	社会福祉法人 如水福祉会如水こども園	1年まいにちワクワクを見つけに行こう！	大分県中津市	19

国土交通大臣賞

金剛沢緑地愛護協力会
住民が憩う新しい里山「八木山テラス」の創生

宮城県仙台市

●八木山テラスの斜面を活用した段々畑。土留には、仙台城の石垣にも使用された三滝玄武石が使われた

本来の里山の姿を残すネイチャーフィールド

金剛沢緑地愛護協力会は、仙台市公園愛護協力会要綱に基づき地域住民が結成した組織で、主に仙台市の金剛沢緑地の一部、通称「八木山テラス」の除草や清掃、設備の保全を行っている。また、八木山テラスを利用する老人会や子ども会のハイキング、市民センターのイベント、春と秋2回開催される野外コンサートなど、地域の団体が企画する活動の支援も行っている。最近は、地域包括支援センターや仙台赤十字病院と協働した健康増進、ラベンダーづくりを通したまちづくり、高齢者や視覚障害者の癒しなど、地域と世代を超えた多様な人々の福祉を包摂する場も提供している。

八木山テラスは、昭和40年代に住宅地として開発された場所に残る緑地で、以前は荒れ果てた草地だった。2020年4月の同会発足後、まず、竹製のシェード「竹ちぐら」を数カ所に設置、それ以外はほとんど手をつけず広大な草地のフィールドになった。

今回の助成では、八木山テラスの下方に位置する「緑化ゾーン」を整備。東北大学から仙台城二の丸の石垣と同じ「三滝玄武石」を譲り受け、湧水の流れを利用した雨庭やビオトープに利用、湿地や植生をコントロールすることで、豊かな緑に覆われた里山を生み出した。当該地は日本タンポポの群生地であり、ニホンカモシカもおりてくる。住宅地でありながら、希少な動植物や昆虫が生息する現代の里山が、地域のシンボル的緑地として育っていくことを期待する。

●東側には恐竜山山頂へ散策路が続く

●木製デッキは毎年行われる野外ライブでは舞台にも利用される

●なだらかな傾斜が続く緑化ゾーンは、子どもたちの格好の遊び場。
冬にはここで雪遊びも

●隣に建つ仙台赤十字病院とは、イベントなどで協力し合うことも多い

●ベンチを覆っている「竹ちぐら」は風通しもよく、夏場はいい日陰になると市民には好評

●自然石を配して小川を再生。
ミズバショウなどの水生植物も植栽されている

特定非営利活動法人awarart（アワラート）

北潟湖畔ガーデン
体験と交流が生まれるクロステラス

福井県あわら市

●ピクニックやウォーキングに利用される「憩いのテラス」では、時々青空マルシェも開催される

緑と湖が織りなす穏やかな景観

海、山、北潟湖や田園といった地域資源の魅力を発掘し、人とつながることで町も人も元気になる。awarartの活動を一言で言えば、魅力的な拠点づくりと多様な人々をつなぐことだ。実際awarartには、農業、旅館、自営、会社員、学生など、さまざまな分野・世代の人々が集まり、まちづくりや人材ネットワークづくりに取り組んでいる。

湖の浸水に悩む遊休地の活用が課題となっていたことから、多世代、多分野の人々が交流できる場を待望する声が上がり、北潟湖畔ガーデンが計画された。

北潟湖畔ガーデンは、日々、散策や憩いの場として開放されている。春と秋には「オープンガーデン＆クロステラス」が開催され、「憩いのテラス」はオープンカフェとなり、「センタースペース」は、ガーデニング講座やリラクゼーション講座に、「眺望スペース」から北潟湖畔ウォーキングへと人々が繰り出してゆく。

「古い舟を花壇にして、資産として伝えたい」と話すのは、ガーデンサークルを立ち上げ、住民の方と除草や花植えに取り組む北浦博美さん。さまざまな企画を実現してきた鈴木奈緒子さんは、「地域と来訪者のクロステラスとなり、未来につながると嬉しい」と話す。美しい景観まちづくり事業にかかわり続けた15年の実績は、綿密に計画された植栽計画に反映されているように思えたが、この船の花壇に、それを補って余りあるセンスの良さを感じた。

●北潟湖に面する周遊道路は、冬の白鳥や鴨の観察やウォーキングの人々が行き交う

●吉崎御坊とあわら温泉との中継地点に位置するので、サイクリングやドライブの途中で立ち寄る来訪者も多い

●かつての釣り船をコンテナ（花壇）に再利用。
北潟湖畔ガーデンのシンボル的存在

●白山と北潟湖とアイリスブリッジを望む絶景スポット。
水中花火も打ち上げられる

●整備が行われる前に植えられていたヤマボウシは、北潟湖畔ガーデンのシンボルツリー

●ガーデニングサークルができ、植栽、除草、水やりなど地域の人々の手で美しく保たれている

札幌アイヌ協会
札幌イオルの森
北海道札幌市

●約900㎡の敷地に整備された「イオルの森」

自然と共にあるアイヌ文化を伝える

札幌市に2003年に開館した「札幌市アイヌ文化交流センター」。敷地内約900㎡のエリアに「札幌イオルの森」が完成した。「イオル」とは居住地周囲に広がる自然を指すアイヌ語で、暮らしを支える食糧や資材供給の場。アイヌ文化を育む豊かな環境のことだ。

「本来は、広大な森林に多様な動植物が豊かに育まれ、人と自然が共生できる環境ですが、ここでは、アイヌ文化に関心をもっていただくきっかけとなる〈シンボル・ガーデン〉として、イオルの森を整備しました」

そう教えてくれるのは、長年、札幌アイヌ協会（会長・阿部一司氏）と共にイオルの再生に取り組んできた農学博士の岡村俊邦さんだ。

敷地は国内外来種のカラマツ林となっていた場所。これを伐採し、イオルを形成する在来種の草木を植栽していく。ただ、在来種のギョウジャニンニクなども自生していたため、土壌を傷つけないよう、伐採したカラマツは馬橇を使って搬出した。おかげで、春にはニリンソウ、エゾエンゴサクなど、アイヌ文化では食用となる草花が芽を出した。さらに岡村さんが種子から育てていた在来種のポット苗40種440本を札幌アイヌ協会会員や近隣の子どもたちと共に植栽した。

敷地の周囲には、近年増加しているエゾシカ避けの柵を巡らせたが、この柵にもアイヌ民族がイオルの自然をどのように活用してきたかなどを記したパネルを配し、この場所の意義を発信している。

●敷地内には、オヒョウやキハダなどの木本が30種320本、ギョウジャニンニクやオオウバユリなどの草本10種120本が植栽された

●周囲にはエゾシカ避けの柵を巡らせると共に、随所にアイヌ文化を伝えるパネルを設置した

●植樹した草木の他にも自生種が茂り、自然な森の姿に近づいていく

●アイヌ民族の生活や文化、歴史を楽しく学ぶことができる「札幌市アイヌ文化交流センター」

●防草シートに守られた植樹された苗木

●「札幌市アイヌ文化交流センター」内に復元されたアイヌ民族の住まい「チセ」。本来は、こうした建物の資材も、イオルの自然が供給する

国土交通大臣賞

花咲き山
緑が育つ人が集まるみんなのガーデン「ららぱーく」

千葉県市原市

●芝生の上は裸足でも気持ちいい

●2011年、東日本大震災の被害を受けた福島県三春の滝桜の子孫樹を譲り受けた。当初は8cmの苗だったものが立派に育っている

●芝生を張った「ちびっこ広場」のある公園としてリューアルされた「ららぱーく」

地域をつなぐ緑あふれる庭

祖母が丹精してきた畑を譲り受け、20年ほど前から、たくさんの草花や果樹を植え、地域の人々が自由に立ち寄れる庭として整備してきた岩﨑光世さん。「ららぱーく」と名付けたその庭は、近隣の姉崎小学校1年生の校外活動の場としても活用されるようになった。次第にららぱーく整備にも賛同者が集い、2013年には任意団体「花咲き山」を設立、月1回の公園整備日を決め活動を行ってきた。また、ららぱーくが椎津城跡（県指定史跡）の要害道に接することから、椎津城跡散策ルートに組み込まれるなど、その存在はさらに広く知られるようになっていく。こうしたことから、より多くの人々が心地よく過ごせる、次世代の子どもたちにも継続して利用してもらえる公園となるよう、今回の助成を活用し、リニューアル整備を行った。

「整備には、小学生の時に校外学習でこの公園に来ていた中学生、高校生も来て、みんなで草花の苗を植え、芝生を張りました。その様子を見ていたら〈幸せ!〉という思いが込み上げてきました。緑豊かな公園には自然と人が集まり、和やかな気持ちになり、心が豊かになる。これまでの活動で、私が心から実感していることです」と岩﨑さん。

5月21日晴天の日曜日、小出譲治市原市長も来園して、リニューアルされたららぱーくのお披露目会が開催された。可憐な花々に彩られた公園には、地域から多くの人々が集い、賑やかに、新たな門出を祝った。

●既存の植物や樹木は適宜移植しながら、道に面した「ボーダーガーデン」にはローメンテナンスで季節を楽しめる宿根草を中心に植栽した

●5月21日に開催されたお披露目会で、挨拶に立つ岩﨑さん。着席者右端が小出譲治市原市長

●お披露目会には地域の人々がたくさん訪れていた

左●芝生広場の奥には「キッチンガーデン」として菜園を整備。今後はこの周囲に「ハーブガーデン」や「ローズガーデン」を充実させていく
上●水盤に飾られた、ららぱーく内の花々

一般社団法人異才ネットワーク
自然やいのちと共生する不登校の子どもの居場所づくり

滋賀県大津市

●さまざまな生き物の到来が期待できるビオトープを設置。生きた自然に触れることの豊かさを実感してもらいたいという思いから

●「好き」や「得意」を中心に自らの学びを追求できるのがトライアンフの特徴

●助成でつくったピザ窯。トマトとバジルを育てて、あとはチーズでピザづくり

●野生の生き物のくらしが観察できるビオトープ。いのちとの共生を身近に感じられる空間

●畑で収穫した野菜やハーブを食すのもコミュニケーションの一つ

●今年は花々をたくさん育てたが、今後は、食べられる野菜をもっとつくりたい

子どもの感性をより豊かに育む空間

大津オルタナティブスクールトライアンフには、ギャラリーが併設されていて、ここに通う子どもたちの絵が展示されている。「ちょうど国際絵画コンクールに出品する作品を、みんなで鑑賞していたところです」と教えてくれたのは、運営母体である一般社団法人異才ネットワークの代表理事谷川知（とも）さんだ。

異才ネットワークは、2018年に発達障害の子を育てる親の会が立ち上げた団体で、2020年からは、非営利型の一般社団法人として活動している。不登校の小中学生を対象に月、火、水、金の週4回開校するトライアンフはフリースクールで、学校のような時間割はない。ゆっくり過ごしたり、ゲームをしたり、勉強したり、子どもがありのままの姿で過ごせることを願ってつくられた。自分の得意なこと、好きなことを中心に、自らの学びを追求することができる。

不登校の子どものなかには、自分の興味を持つ分野に深い知識をもち、水生生物や植物に関して、学年年齢を超えた探究心をもつ子どもも少なくない。今回の助成でビオトープを設置したのは、野生の生き物が身近に観察できて、生きた自然に触れられるからである。「助成でつくったピザ窯を活用し、学校に行きづらい子どもやその保護者にも来てもらい、みんなでピザづくりをするのも面白い」と谷川さん。

学校とは違うもう一つ（オルタナティブ）の学びの場になることを期待したい。

社会福祉法人想伝舎
食・農・遊び 五感を育む園庭作りプロジェクト
宮城県遠田郡美里町

●ダメージを受けても再生しやすいハーブ類、エディブルフラワー、ベリー類などが植えられている本園舎の玄関付近

●湿気の強さを利点にビオトープをつくる。子どもたちが水生生物と触れ合える場所

●エントランスエリアでは、季節感のある華やかな花木や草花が保護者を迎える

●強い西風を遮るためフェンス沿いに常緑樹とコニファー類を組み合わせて植栽する。写真は、つる性植物をはっているところ

●木製Boxの果樹園。陽当たりのいい斜面を利用してリンゴ、グミ、モモ、ウメ、カリンなどを栽培する

●昨年完成した「離れ」には、土間キッチンとピザ窯が設置された

庭づくりが食育と環境教育を結びつける

2020年4月に認可保育園として開園した「食と森の保育園美里」は、2022年4月幼保連携型認定こども園「食と森のこども園美里」へ移行した。

言うまでもなく「食」は、地元の食材を活かす「食育活動」を、また「森」は、自然と地域資源を活かす「環境教育」を意味する。未来を担う子どもたちにとって食べることは生きることそのものであり、それは、豊かな自然と自然資源を上手に活かしながら生活していくことでもあるのだ。

人と自然の共存を目指すパーマカルチャーを意識しつつ、植物の生態と自然環境の循環に留意しながらスタートした庭づくりだったが、現実は、予期せぬことの連続だったという。子どもたちの行動パターンを把握し、園庭の環境条件を考慮したうえで、植栽計画をたて実施したはずが、実際の子どもの行動パターンは不確実で、自然環境も予想と食い違うものだった。結局、試行錯誤を繰り返しながらの造園になった。

「自然の循環や地域のつながりを肌で感じられればいい。庭づくりが結果的に学びになるわけで、子どもたちにとってはそれでいいのかもしれません」と鈴木聡子園長は笑う。

助成でコンポスト用の材料を購入。つくった野菜の残滓や雑草をコンポストにして畑づくりに利用する。その循環が機能すれば、「食」と「森」はリンクする。庭づくりが食育と環境教育をつなげるのである。

群馬県立藤岡北高等学校
環境土木科ガーデニングコース
みんなの広場 いこいの杜（もり）
群馬県藤岡市

●群馬県立藤岡北高等学校と群馬県立藤岡特別支援学校は、2021年から協力してさまざまな活動を展開している。ブドウ棚や東屋の設計・施工もその一つ

●「みんなの広場 いこいの杜」という名称は、生徒たちによるもので、看板も生徒たちの手づくり

●敷地内にもともとあったセンダン3本を残して、シンボルツリーにした

●敷地の北側には3基連結したコンポストが置かれている。これは、農業の作業学習で出る植物残渣を堆肥化させるためのもの

2校の協力で実現した休憩&コミュニティの場

群馬県立藤岡北高等学校環境土木科ガーデニングコースが群馬県立藤岡特別支援学校と協力関係のもと「いこいの杜」づくりに取り組んで3年が経過した。2023年3月に緑化助成は終了したが、終了後も「いこいの杜」は永続的に維持されていて、今後も継続されるだろう。学校同士の交流が長期にわたる例は、多くはない。しかも、毎月話し合いをしながら、一緒に広場づくりをするというのは、きわめて珍しいケースだ。

「いこいの杜」は、①藤岡特別支援学校の農業の作業学習中の休憩場所として、また②地域の人々が自由に利用し、特別支援学校を知ってもらうためのコミュニティの場という二つの役割をもっている。

敷地にはセンダンの木が大きく育っていたが、整地するにあたり、3本のみを残し伐根。残ったセンダンは休憩場所（木陰になるので）として活用された。

「いこいの杜」のコンセプトにSDG’sの17の目標から六つを選び庭づくりに活かされている。東屋、ブドウ棚、コンポスト枠、花壇用の枠は、再利用木材を使用。いずれも藤岡北高校と特別支援学校の生徒たちが協働して意見を出し合い設計図を引き、両校の生徒たちが協働作業で施工をした。また花壇の植花は両校で行い、花壇の管理は特別支援学校の生徒が行うというように、植生の管理運営も両校が協力して行っている。学校間連携に関心が集まるなか、SDG’sの観点を取り入れた協力関係に期待したい。

群馬県立富岡実業高等学校 草花部
富岡の歴史に触れる庭プロジェクト
群馬県富岡市

●社会教育館の入り口付近にポケット・ガーデンを造成。デザイン・施工は富岡実業高等学校 草花部が担当した

●今後は、自分たちが栽培した草花や野菜などを販売することも検討中とのこと

●社会教育館の入り口は、一般道路に面していて、通行人からもよく見える。景観の向上にも寄与したい

●季節の花々を楽しめて、季節の移り変わりを肌で感じられる庭を目指す

●階段から見て楽しめるように、ツツジやアジサイなどの低木を植えた

●レンガの花壇、瓦の花壇、石の花壇…、古き良き伝統を現代に甦らせる

古き良き庭園を感じさせる場にしたい

富岡市社会教育館の庭園は、市内の宮崎公園と並んで、古くからツツジの名所として知られていた。富岡実業高等学校草花部は、自生していたヤマツツジやオオヤマツツジの保存再生活動を行ってきた縁から、社会教育館の庭をツツジを中心にするシンボルガーデンへ造成するプロジェクトにかかわるようになった。

富岡市社会教育館は、1936年に精神修養施設である「東國敬神道場」として建てられたもので、戦後は群馬公民会館、群馬県立社会教育会館と名称を変えながら現在に至っている。2008年に国の登録有形文化財にも登録された。

「私たちは、富岡市役所や富岡製糸場、宮崎公園の花壇の管理の手伝いなどもやっているんですよ」と言うのは、富岡実業高等学校の安藤覚先生だ。

「宮崎公園はツツジが有名で、なかには樹齢100年を超えているものも。そこで、挿木して育て、その苗木を近隣に配るという活動をやろうと思っています。そのつながりで、社会教育館にもツツジを植えて、古き良き庭園を感じられる場所にできれば」と語る。

今回の助成でとくに力を入れたのは、建物の玄関に続くエントランスだ。草花部の生徒たちが企画・設計し、施工も自分たちでやったという。社会教育会館でのイベントも計画中とのこと。農業高校という特徴を活かし、野菜や草花の販売も企画しているとのことで、今後の展開が楽しみである。

新潟県立島見緑地聖籠緑地指定管理者 株式会社日建緑地
みんなの花壇プロジェクト
新潟県北蒲原郡聖籠町

●木陰には、幹を囲む円形ベンチも設けられた

●就労支援事業所の子どもたちが製作した、園路の入り口を彩るレイズドベッド

●「ポタジェ（家庭菜園）」をテーマにハーブが植えられた円形花壇

●花壇の植栽にはそれぞれテーマがあり「白い花壇」には白い花をつける植物が、「触れる花壇」には葉の手触りが特徴的な植物が植えられている

●ふれあい広場の一角に完成した「みんなの花壇」エリア。イラストパネルは聖籠中学校の生徒が描いた

交流を育むレイズドベッド

新潟東港の緑のオアシスとして市民に親しまれている新潟県立島見緑地・聖籠緑地。2003年、新潟東港工業地帯の緩衝緑地帯として開かれた公園は海岸線に沿って細長く続く広大な緑地帯だ。今回、緑地全体の管理運営を担う指定管理者・株式会社日建緑地により計画された「みんなの花壇」は、聖籠緑地内「ふれあい広場」の一角に完成した。近隣住民がウォーキングやレジャーにと日常的に利用している公園だが、「みなさんが公園をもっと身近に感じられるような、交流できる場をつくりたいと考えました」と、公園管理職員で園芸療法士の資格ももつ猪俣恵さんは教えてくれる。

インターロッキングブロックで園路をつくり、その周囲には屈むことが難しい高齢者や車椅子利用者でも草花の手入れができる花壇・レイズドベッドや、レンガで造作した円形花壇を点在させた。植栽にあたっては地域の人々に参加してもらったことで、この時の交流から、近隣住民有志による「ガーデンクラブ」も誕生しているという。

園路の入り口にはイラストの描かれた個性的なレイズドベッドが2基設置されている。この製作には地域の就労支援事業所に協力してもらった。「イラストの色彩がステキで、このエリアを象徴するアート作品のように仕上がりました」と猪俣さん。さまざまな人々が参加し、完成した「みんなの花壇」は、思い描いた通りに、人々の交流を育む、豊かな空間となっている。

特定非営利活動法人 備前プレーパークの会
どんぐりの森 コミュニティガーデン

岡山県備前市

●耕作放棄地だった土地を活用し「備前プレーパーク」として整備。今では、木製遊具や東屋、ウォータースライダー用のプールなどが所狭しと設置されている

●どんぐりの木や果樹などが植樹されたプレーパークには、手づくりの木製家具やリサイクルされたテーブルやイスなども置かれている

●これまでは子育て世代が中心だったが、今後は地域の人たちにももっと利用を呼びかけたい

●木々こそ格好のシェードだ

●日が暮れるとシカが多くやってくる。今年の夏はシカ対策に追われる日々だったとか

●子どもはどんぐり拾いが大好き

0歳から100歳までのプレーパーク

特定非営利活動法人備前プレーパークの会は、「備前プレーパーク！ 森の冒険ひみつ基地」を活動拠点とし、「子ども、子育て、環境、地域コミュニティ」をテーマに、冒険遊び場づくり活動、地域子育て支援拠点活動、森のようちえん事業などを行っている。「備前プレーパーク」は、借り受けた里山全体の名称で、以前は、裏の里山が遊び場の中心だったが、「小規模保育園どんぐりえん」の開園を機に、園舎の南下に移動。ただ、広場として利用する対象地は、長年耕作放棄地だったため、日差しを防ぐものがなく、緑化整備が急務だった。今回助成を受けるにあたって、コナラ、クヌギ、アラカシ、マテバシイ、スダジイといったどんぐりの木やレモン、ヒメリンゴ、イチジクやユズなどの果樹を中心に植栽した。

「昨年は猛暑で苗木がうまく育つか心配でした。幸い生育は順調ですが、じつはもう一つ課題がありまして。ここはシカがたくさん出るんですよ。シカはどんぐりが大好物。猛暑とシカ対策に追われた夏でした」と備前プレーパークの会代表・北口ひろみさんは話す。

「時間はかかりますが、どんぐりの小さな実が大きな木に成長していくように、この広場全体が〈どんぐりの森〉になることを願っています」

人と環境にやさしいコミュニティガーデンをいかにしてつくるか。環境保全や生物多様性に、その鍵がありそうだ。

香川大学創造工学部環境デザイン工学領域
ウェルカム「レイン」ガーデン“ぽぽぽ”

香川県高松市

●季節ごとに花をつける在来種を植栽。生物多様性の向上を始め、訪れる人々の憩いの場、コミュニケーションの場となることも配慮した

●香川大学工学部キャンパスに誕生した「雨庭（レインガーデン）」

●土管の花壇。廃材を再利用することでサステナビリティについても関心をもってもらえるよう工夫

●雨水処理機能などの研究のために設置された自作の装置

●廃材を利用し「WELCOME」の看板を設置。親しみやすい雰囲気の庭になるよう設計した

水循環で持続可能な環境を形成する「雨庭」

近年は全国的に、気候変動に伴う異常気象の多発が問題になっている。大型台風やゲリラ豪雨などによる洪水が深刻化する一方、極端に降雨の少ない日照りに見舞われることもある。こうしたなか、都市型洪水を減災するグリーンインフラの一つとして「雨庭（レインガーデン）」が注目されている。今回、香川大学創造工学部では助成を活用し、キャンパス内約300㎡の敷地に雨庭を造成、その造園プロセスから、造園後の効果や機能について実測検証をスタートした。

「敷地はもともと粘土層で、水捌けが悪い一方、乾燥するとひび割れができるような土壌です。そこを30cm程掘り、川砂や瓦破砕材などを混ぜた透水性の高い土壌に改良し、雨水を一時的に貯水できる窪地を整備。周囲にアヤメやスカシユリ、ツワブキなどの在来種の草花を植栽して耐水性を高めると共に、季節ごとの花を楽しめる庭として整備しました」。担当教官として指揮をとった環境デザイン工学領域助教の小宅由似さんはそう教えてくれる。また、雨庭の造園にも携わった大学院生の中原康成さんは、設計に対する雨水の処理機能や周辺環境への影響などの実測検証を行っており「今後も、定量的な機能や維持管理の手法など、多面的に調査・研究していきたい」と意欲を語る。他大学や民間企業との共同研究も計画されている。

ハマナデシコやキキョウが咲き、のどかな表情の雨庭は、都市環境向上への大きな可能性を秘めている。

熊本県立熊本農業高校
季節を感じる熊農緑地～地域の拠点としての役割を発信する空間づくり～

熊本県熊本市

●災害時に炊き出し用のかまどにもなる「かまどベンチ」。ベンチの周りには土跳ねしないようレンガを敷いた

●もともと石庭のように造作されていた同窓会の台湾交流記念モニュメントの周りを竹垣で囲み、オタフクナンテンを植え、緑地のポイントとなるよう整備した

●ハーブ類を植栽した花壇と一体になったベンチ。子どもたちが植物に触れ合うスペースとして位置付けられている

●鬱蒼としていた常緑樹を整理し、明るい緑地としてリニューアルされた「熊農緑地」

●敷地内を巡ることができるように整備された園路

生徒たちが手がけた緑豊かなくつろぎの空間

創立125年を迎える熊本県立熊本農業高校。その正門に近い約1000㎡のエリアが、生徒らにより「熊農緑地」として整備された。敷地はもともと常緑樹を中心とする緑地となっており、中央には同窓会のモニュメントが設置されていたが、成長した樹木が鬱蒼と茂り、あまり利用されない空間となっていた。このため、農業土木科2年生の実習として再整備を計画。同校は地域の防災拠点でもあるため、避難所としての機能に配慮しつつ、日常的には、生徒や地域の人々が緑豊かな空間を楽しみ、くつろげる場とすることを心がけた。

エリア内には、水捌けの良い山砂モルタルを用いた園路を整備、その周囲には、災害時に炊き出し用のかまどになる「かまどベンチ」や、ハーブ類を植栽した花壇と一体となったベンチなど、座ってくつろげる空間を多く設けた。既存の樹木は植え替えを行い、開けた空間には芝生を敷き詰めた。また紅葉を楽しめるオタフクナンテンを植えるなど、季節ごとの彩りを楽しめる庭になるよう、植栽を工夫している。

「園路に沿って湾曲させたハーブ花壇が、緑地のアクセントになりました」とは整備を担当した木下知歩美さん。同じく冨永拓也さんは「園路を平らに整備するのが大変でした」と教えてくれる。

訪ねた時は、熊本市の事業「くまもとオープンガーデン」開催中で「熊農緑地」もこれに参加。高校生が手がけた緑地は、訪れる人々を暖かく迎え入れていた。

社会福祉法人 如水福祉会 如水こども園
1年まいにちワクワクを見つけに行こう!

大分県中津市

●子どもたちと一緒に行った三和土ワークショップで誕生した円形の広場

●園路の周囲に集めた果樹林で実をつけていたクルミ

●地域との境界にあたる園路の外側には、季節の草花やブルーベリー、ジューンベリーなど、実のなる中低木を植栽

●自然素材を用いた園路を整備、子どもたちが安心して遊べる場を整備した

●自然豊かな園庭で裸足で遊ぶ子どもたち

多彩な自然体験から、健やかな成長を育む

大分県中津市の如水こども園。自然の中での体験と学びを重視するこども園では、広々とした園庭で、0歳～就学前の子どもたちが元気に遊んでいる。今回の助成では、子どもたちにより多彩な自然体験を提供したいと、園庭の境界、これまでは樹木が鬱蒼としていたエリアのリニューアルを実施。自然素材の竹チップや真砂土を用いた園路を整備し、子どもたちが裸足で、はいはいでも遊べる、安全で心地よい空間をつくった。

「今までは樹木が園庭の目隠しになっていましたが、そこに園路を整備し草花を植え、地域の方々にも子どもたちが元気に遊ぶ姿を見ていただき、自然と交流できる場にしていきたい」と言うのは土田秀仁園長だ。

既存の背の高い樹木は園路の内側に移植、外側にはナノハナ、コスモスなどの草花やブルーベリーなどの中低木を植え、園庭外からも季節の彩りを楽しんでもらえるようにした。この他にも、蛇行する園路の周辺にはウメやクルミ、ビワなど実のなる木を集め、子どもたちと一緒に実りを観察、収穫して楽しめる空間として整備した。また子どもたちと一緒に、園路と同じ素材での三和土ワークショップを行い、円形の広場もつくった。ワークショップは今後も定期的に開催し、園路の修繕もみんなで行えるようにしていくという。

「今後はこの場を、地域の公園としても使えるようにしたい」と土田園長。新しく誕生したエリアでの、地域交流イベントも多く計画されている。

募集の対象

シンボル・ガーデン部門	全国を対象	緑のもつヒートアイランド緩和効果、生物多様性保全効果などを取り入れることにより、人と自然が共生する都市環境の形成及び地域コミュニティの活性化に寄与するアイデアを盛り込んだ地域のシンボル的な緑地プランを募集します。
ポケット・ガーデン部門	全国を対象	日常的な花や緑の活動を通して、地域コミュニティの活性化や保育園・幼稚園、学校、福祉施設などでの情操教育、身近な環境の改善に寄与するアイデアを盛り込んだプランを募集します。

表彰

シンボル・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点	副賞800万円以内（工事に対する助成金）
	都市緑化機構賞	1点	
	第一生命賞	1点	
ポケット・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点	副賞100万円以内（工事に対する助成金）
	第一生命財団賞	1点	
	コミュニティ大賞	8点	

※副賞金額は2022年当時

審査委員

委員長	進士 五十八	福井県立大学学長／東京農業大学名誉教授
委員	天河 宏文	国土交通省都市局長
	稲垣 精二	第一生命保険株式会社代表取締役社長
	近藤 豊和	株式会社産業経済新聞社上席執行委員
	坂井 文	東京都市大学都市生活学部教授
	永山 妙子	マネジメントコンサルタント
	三上 真史	俳優・タレント
	村上 暁信	筑波大学システム情報系教授
	盛田 里香	一般財団法人第一生命財団常務理事
	梛野 良明	公益社団法人都市緑化機構専務理事

※役職は2022年審査会当時

スケジュール

募集期間	2022年4月1日～6月30日
審査会	2022年8月23日
入選発表	2022年10月14日

主催等

主催	公益財団法人都市緑化機構、一般財団法人第一生命財団
後援	国土交通省、環境省、全国知事会、全国市長会、全国町村会、第一生命保険株式会社
協力	一般社団法人建設広報協会、一般社団法人日本公園緑地協会、一般社団法人日本造園建設業協会、都市緑化基金等連絡協議会、株式会社産業経済新聞社

※2022年度運営体制

city&life 別冊

2024年3月19日発行

発行者　一般財団法人 第一生命財団
東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階
電話03-3239-2312

編集協力　株式会社 アルシーヴ社
斎藤夕子

撮影　坂本政十賜

デザイン・レイアウト　生沼伸子

印刷　株式会社 エイチケイグラフィックス

ISSN 0289-7172
一般財団法人 第一生命財団

city&life 別冊